

大学生の就職活動維持過程の検討 : 不採用経験の克服に着目して

著者	軽部 雄輝
発行年	2016
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2015
報告番号	12102甲第7877号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00143653

氏 名 軽部雄輝
 学位の種類 博士（心理学）
 学位記番号 博甲第 7877 号
 学位授与年月 平成 28年 3月 25日
 学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
 審査研究科 人間総合科学研究科
 学位論文題目 大学生の就職活動維持過程の検討
 ー不採用経験の克服に着目してー

主 査 筑波大学准教授 博士（人間科学） 青木佐奈枝
 副 査 筑波大学准教授 博士（文学） 岡本 智周
 副 査 筑波大学教授 杉江 征
 副 査 茨城県立医療大学准教授 博士（心理学） 佐藤 純

論文の内容の要旨

（目的）

本論文は、就職活動を行う大学生が、就職活動の過程で不可避な経験である「企業からの不採用経験」をいかに乗り越え活動を継続していくのかという「就職活動維持過程」を解明することを目指すものである。不採用経験によっては、個人が不安、ストレス、抑うつ症状、挫折感といったさまざまな不適応的影響を受けることが明らかにされてきているが、そうした反応を受けながらも個人がいかにして就職活動課題を「乗り越えていくか」という視点に立った検討はこれまでなかった。そこで、個人の就職活動における不採用経験の克服過程に関する検討が求められている。

本論文では、就職活動維持過程の内容、就職活動維持過程の機能、就職活動維持過程に影響を与える要因について実証的に検討し、数々の不採用経験を受けながら個人が就職活動を維持していく過程そのもの、その過程を経験することによる影響、またその過程に関わる要因を明らかにすることを目的とする。本論文の目的を達成するために、以下の3点について、実証的に検討している。

1点目は、就職活動維持過程に関する質的モデルと量的測度の開発である。これまで、不採用経験が不可避である就職活動を個人がいかに継続していくかに注目した検討がなされてこなかったため、新たに就職活動維持過程についての質的モデルと、就職活動を維持するために行われる行動を測定する信頼性・妥当性を備えた尺度を作成することを目指す。2点目は、就職活動維持過程の経験が就職活動の結果を示す指標や活動後の個人の適応状況に与える影響の検討である。個人が就

職活動を維持していくことを通して獲得する要因や資源を明らかにすることを目指す。3点目は、就職活動維持過程に関わる要因の検討である。これまで、就職活動を促進する要因としては自己効力が主に検討されてきたが、数々の不採用経験によって個人が自己否定感や挫折感を抱くことが不可避な就職活動の維持を支える自己効力以外の要因について新たな示唆を得ることを目指している。

(対象と方法)

対象は、一般企業への就職活動を行っている、または終了した大学生であった。合計 1163 名が調査に協力し、2012 年 7 月から 2015 年 2 月にかけて 1 回の半構造化面接調査と 7 回の筆記および web 回答形式の質問紙調査を行った。調査の実施にあたっては、筑波大学人間総合科学研究科研究倫理委員会の承認を受けた。

(結果)

研究 1 では、就職活動を終了した者の語りに基づき、大学生の就職活動維持過程モデルを生成した。本モデルは、活動当初から行われ、個々の不採用経験を受けての具体的対処や当面の就職活動を維持していくための現在志向的行動が行われる一次的過程と、就職活動を一定に経験した後には一次的過程に追加される形で並行され、現実的将来を見据えたより深い自己洞察を伴う思考的作業を含む未来（目標）志向的行動が行われる二次的過程から構成された。研究 2 では、研究 1 のモデルに基づいて大学生の就職活動維持過程尺度を作成し、信頼性と妥当性を確認した。研究 3 では、就職活動を終了した者の初期と終期の 2 時点の回顧法調査から、就職活動維持過程と就職活動時期との関係について明らかにした。研究 2 および研究 3 から、作成尺度が、就職活動の当初より行われている一次的過程として「不採用経験の振り返り」、「認知的切り替え」、「模索的行動」、「他者への自己開示」、一定の経過の後に追加的に行われる二次的過程として「目標の明確化」、「自分らしい就職活動態度の確立」の経験程度を測定しうることを示された。研究 4 では、就職活動中の大学生を対象とし、個人の就職活動維持過程を就職活動の 2 時点から縦断的に検討した。研究 3 とおおむね同様の得点変化の方向性を示し、作成尺度が活動中の学生に対しても適用可能であることが示された。研究 5-1 と研究 5-2 では、就職活動維持過程の経験が結果を示す指標に与える影響を検討した。研究 6・研究 7・研究 8 では、就職活動維持過程に影響を与える要因について検討した。自己要因を検討した研究 6 では「資質的レジリンス要因」と「私的自意識」が、他者要因を検討した研究 7 では「父親からのサポートの活用」と「深い関与・関心」をもつ友人との関わりが、取り組み方要因を検討した研究 8 では就職活動開始前の「意気込み」と就職活動中の「活動調整方略」が、就職活動維持過程の一次的過程と二次的過程の双方を促進することが示されている。

(考察)

本研究では、大学生の就職活動維持過程が、現在志向的行動が行われる一次的過程と未来志向的行動が行われる二次的過程という 2 つの過程から構成されることを明らかにした。また、質的検討と量的検討の知見を併せ、就職活動を苦しみながらも維持する中では一次的過程に加えやがて二次的過程も経験されることで良好な影響がもたらされると考えられた。さらに、就職活動を行う学生に対しては、楽観性・社交性・統御力・行動力などの「資質的レジリエンス要因」と自身の内面への注意の向けやすさである「私的自意識」、「父親からのサポートの活用」と「深い関与・関心」をもった友人関係、就職活動を開始するにあたっての「意気込み」と自分の状況に応じた活動を行っ

ていく「活動調整方略」、以上の点を促す支援を行っていくことが有効であると示唆された。

本論文は、これまで実証的な知見がなかった就職活動を維持する過程に着目した点において、新たな視座を提供するものである。また、提出されたモデルや尺度を用いて、個人の就職活動を過程という視点から把握し、状況に応じた支援を考えるための資料を提供しうるものであるため、就職活動の維持を志向する学生とその支援者双方に対して、就職達成やその後の社会人生活への円滑な移行に際しての見通しおよび参照枠を与えうるものである。

最後に、本研究の課題として、個人を追跡した検討による就職活動維持過程の追検証、一次的過程と二次的過程の接続に関する実証的検討、という2点があると考えられる。

審査の結果の要旨

(批評)

本研究は、就職活動を行う大学生が、就職活動の過程で不可避な経験である「企業からの不採用経験」をいかに乗り越えて、就職活動を継続していくのかという「就職活動維持過程」を心理学的に実証的に検討したものである。本研究の独創的な点は、就職活動を終了した学生の語りに基づいて「大学生の就職活動維持過程モデル」を生成し、不採用を経験しながらもいかにして活動を維持していくのかを質的に明らかにした点である。そして、さらに質的研究で生成されたモデルに基づき、そのモデルの各概念を測定する尺度を開発し、就職維持過程を評価する結果指標や就職活動維持過程に影響を与える関連要因を取り上げて、実証的にモデルの検証を行った点である。本研究では、大学生の就職活動維持過程が、現在志向的行動が行われる一次的過程と未来志向的行動が行われる二次的過程という二つの過程から構成されることを明らかにし、その二つの過程を経験していく中で、困難を経験しながらも自己成長していくプロセスや自己成長を促進するような関連要因を明らかにしている。これは実証的な知見がなかった就職活動の維持に関する研究において新たな視座を提供するものである。さらには、青年期にある大学生が、困難に接しながらも就職活動を通して自己を確立してくという発達心理学的にも、臨床心理学的にも重要な知見を提出しているともいえる。本研究の成果は今後のこの領域の研究に大きく貢献するものであり、高く評価できる。

以上、研究の意義、独創性、成果、論文のまとめ方など、博士論文としての水準に達していると判断される。

平成 28 年 1 月 25 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。